髙橋 伸彰 先生 を偲ぶ

髙橋先生を偲ぶ

教育学部長　山　口　孝　治

髙橋先生，教育学部は，いや，本学は本当に惜しい人材を失いました。今，こうしてこのような原稿を執筆しなければいけないことが残念でなりません。今から思うと，きっと体調が芳しくないことが少なからずあったことでしょう。「何かサポートできることはなかったのか」と考えるばかりです。

髙橋先生の年齢や大学人としてのキャリアを考えたとき，きっと研究者として，教員として，やりたいことや学生達に伝えたいことが，数多くあったことでしょう。そのことを思うと胸が締めつけられる思いです。北警察署で先生のご遺体と対面したとき，お母さんから「あの子はどのような思いで逝ったのでしょうか。」と尋ねられました。そのとき，私は「きっと，悔しかったと思います。」と答えました。私の回答に対するお母さんの寂しそうな顔が，今でも思い出されます。

先生が本学に着任されてからの2年と少しの期間，先生とは研究室が同じフロアにあったこともあり，よく廊下でお会いしました。本当に朝早くから夜遅くまで，熱心に仕事をされていて，頭が下がる思いでいました。会議では，みんなが見落としがちなことを鋭く指摘されていたことが何度もありました。その度に髙橋先生の視野の広さに感服したものです。この4月から，臨床心理学科の様子を見させてもらうようになり，履修指導を始め，学生指導を中心になってされている姿は，とても頼もしく見えました。近い将来，きっと学科や学部の中心になり得る人材であったと思うと，とても残念です。

本学にご着任頂き，過ごして頂いた時間は本当に短いものでしたが，髙橋先生の真摯で妥協のない働きぶりは，私たち教員の心の中に，また，研究に対する姿勢や思いは先生の指導を受けた学生の心の中に，それぞれいつまでも残ることでしょう。さらに，先生がオープンキャンパス用に作成されたDVDは，これから臨床心理学科の入学を希望する高校生達にも，きっと伝わると思っています。

私たちは，そうした，先生の思いを受け継いで，これからも頑張っていきたいと思っています。どうか，その様子を遠い空の上から見守ってください。

最後に，先生は，本当にエネルギッシュに何事にも邁進されていました。今は，少しゆっくり休んでほしいと思います。髙橋先生，本当にありがとうございました。

髙橋伸彰先生へ

臨床心理学科長　牧　　剛　史

髙橋先生。先生とお別れして6か月が経ちました。もう涙は枯れたかと思っていたのですが，先日，髙橋ゼミだった学生から「髙橋先生は『牧先生と仲良くしたいなあ』と仰ってましたよ」と聞いて，また涙が出てしまいました。先生，一緒にビールを飲みながら，もっと話がしたかったですね。僕はあまりお酒を飲めないので，先生がジョッキ2，3杯を飲む間に生小くらいしか飲めませんが，きっと先生なら「僕ばっかり飲んでますけど，いいですか？」と恐縮しながらも笑ってくれただろうなと思います。半年経った今でも，学生と話しているときや，ケースカンファレンスで先生が座っておられた席を見るたび，先生のお姿や笑顔が脳裏をよぎります。

ここで先生にご報告しなければいけないことがあります。去る9月19日に，先生を偲ぶ会を開かせていただきました。勝手にすいません。どうしても開きたくて，礼拝堂と12号館の多目的室を使ってさせてもらいました。佛大の関係者だけでなく，これまでの卒業生や関西学院の方々，先生の研究仲間の方々なども来て下さいました。髙橋先生が本当にたくさんの方から愛されていたことが感じられました。

偲ぶ会の時には，佛大通信で先生が書かれていた文章を紹介しました。「人間が面白いのは個人差があるから。私は，自分が見ている風景と，人が見ている風景は同じなのかなと思うような子どもでしたが，その興味はいまも変わりません」という文章です。髙橋先生と僕は，研究テーマも違いますし，心理療法のオリエンテーションも違います。これまではいつも仕事の話で，教務のことや公認心理師カリキュラムのことばかりを話していましたね。もっと研究のことを話したかったです。ケースカンファレンスが終わったあと，15号館から研究室への帰り道で時々研究の話をしましたが，もっとたくさん話したかったですね。実は，先生の研究に対する誠実な姿勢や熱量に，僕はあこがれて，少し羨ましいとすら思っていました。今ごろ言うなと言われてしまいそうですが。これから，自分が心理臨床の研究をする際に，髙橋先生の姿勢を密かに指針としようと思っているのですが，お許し下さい。

先生の「心」は，きっとたくさんの人の胸に届き，残り続けていくのだと思います。もうお話しできないと思うと寂しく，哀しい気持ちでいっぱいになりますが，これからも心の中で先生とお話をしていきたいと思っています。臨床心理学科に来て下さって，本当にありがとうございました。

私にとってのカンパネルラ－髙橋先生を偲ぶ－

臨床心理学科　免　田　　賢

髙橋先生が逝去されて，もう半年がたった。髙橋君は私の後輩であり，相談相手であり，師であり，そして大切な同行の友であった。つまり私にとっては，なくてはならない存在であった。

彼と最初に出会ったのは，2011年秋の関西学院大学での集中講義においてであった。その授業では，10数名の院生と研究員に対して行動療法の話をした。そこで彼と出会ったということは，彼が佛教大学にやってこられてから本人から聞いたことである。

次に出会ったのは，本学の教員としての採用面接の時であった。彼は認知心理学の模擬授業をした。テーマはWasonの4枚カード問題やリンダ問題を使った代表性ヒューリスティックという認知バイアスについて，説明するものであった。彼はスライドを用い授業をした。とてもわかりやすく，明快であった。自由面接の際，休日はどのように過ごされているのですかと私が尋ねると，彼はとてもうろたえて自転車であちこち走り回っていますと答えた。赴任された後，なんであんな質問をするのかびっくりしましたよと，彼は私に笑って話してくれた。

本学に赴任が決まったあと，宮下照子先生が彼と二人で会ったときの印象を話してくれた。その印象は「あなたよりはるかに社会性がある，大人の人だよ」というものであった。心理を専攻する研究者や臨床家においては，常識家やバランスのよい人という評価は希有である。それどころか多少エキセントリックなことを自認している節がある。彼と話していると，心理臨床の専門家と話しているのとはちがう感触の頭の働かせ方をしている気持ちになった。それは，ある問題を考えるときの問いの立て方であり，自分が心理学を学びはじめたときに覚えたアプローチの発想であり，方法論であった。あることの解を求める際に，たくさんの要因を一度に入れようとしないこと，調べることを決めること。そして手続きを明確にすること，得た結果からわかる以上のことを語らないこと，そして自己という存在を捨象して現象をみるということである。これは現代心理学の存立構造でありパラダイムといえるものである。その大切さを自分は長く忘れており，問題を複雑にして難解にしすぎていたり，シンプルな現象に理屈をこじつけていたように思う（牽強付会というらしい）。そのようなことを思い出させてくれたのは，彼であった。

それを裏付けるがごとく，彼の研究室のドアには，「オッカムの剃刀」で有名な神学者オッカムの肖像が貼られていた。オッカムは，あることを説明するのに多くの仮説構成体を仮定しすぎないこと，できるだけ少数の原理で多くの事象を説明できるように心がけるのが学問（科学）の理想であると説いた人である。

一方で，彼は単なる基礎の専門家ではなく臨床心理学のアプローチに強い関心をもつ人であった。元々の彼の関心は，依存や嗜癖行動に対する行動的アプローチであり，また学校現場への行動的介入など幅広いものであった。オッカムの剃刀と並んで，髙橋研究室ドアには，Serenity Prayer（平安の祈り）の全文が貼られていた。これは嗜癖だけではなく，様々な臨床に携わるときのバイブルのようなものだと私は思っている。

「神様　私にお与え下さい　自分に変えられないものを受け入れる落ち着きを！変えられるものは，変えてゆく勇気を！そして，二つのものを見分ける賢さを！」。

臨床心理学とは，変えられないものを受け入れる落ち着きをどう得るかの智恵，そして変えられるものを変えていく実践の2つからなっていると思う。

彼に佛教大学の臨床心理相談室で思春期向けのペアレント･トレーニングのアイディアを話すと，「やりましょう」と快諾が得られた。そこで，2017年に臨床心理研究センターの研修員であった関谷実加さんと3人で，文献をお互いに紹介するようにして，プログラムセッションを構成した。三人とも，思春期のプログラムに必要なテーマは子どものleaving homeに関することであり，親子が互いに自立することであり，子どもが社会へとデビューする際に親から伝えておきたい，ライフスキルを子どもに獲得させることと捉えていた。

しかし，プログラムの構成で意見が分かれた。私は，性の問題，学校との関係，就労や適性のこと，などテーマセッションを考えていた。しかし，髙橋君は行動原理を明確に親に伝えることを重視し，その上で親が各家庭のニーズに合わせた応用できることを主眼においていた。「基本が大切ですよ」とその根拠を説明してくれる彼はとても生き生きとしていて，主張も力強いものであった。実際にプログラムが開始されると，彼はお母さんの話を第1によく聞き，そして支持し，よい方法を一緒に考え，喜び，時には一緒に悩むよき臨床家であった。何よりも，介入が親と子にどのように奏功しているのかのアセスメントについて，とても丁寧にみていく研究者であった。筆者が忘れられないのは，参加者の抑うつ状態を調べるBDI（ベックうつ尺度）について彼が文献的根拠を確かめようとしたことである。BDIは初版を当たり前のようにこれまで使っていたが，彼はBeckの原著を取り寄せアセスメント項目の確認をした。これは紀要を仕上げる関谷さんのためにでもあった。結果として思春期プログラムは，彼と2回実施することができた。そして紀要論文としてまとまった（関谷･髙橋･免田，2018）。

彼の研究的潔癖さは，卒業論文における無断引用について強い危機として，表明された。教育上そして倫理上，学生がコピペして論文を作ってしまうことは厳に防止する必要がある。学生が無知から先行研究や論文を剽窃し盗用しないように，専門講義をおこなうように主張したのは彼である。こんなことでも，佛教大学教育学部臨床心理学科を，そして学生を守るために来てくれたのだと本当にそう思う。

今は島根大学にいる石原宏先生が「免田先生をよくかばうんですね」と彼に言ったとき，彼は「僕は免田先生を守るためにここに来たんです」と言ってくれたことを忘れられない。面前で真剣にそういうことを言う男であった。彼は，自分をいつも守ってくれた。そして学科を，さらには大学を守ってくれたのだと思っている。しかし，自分は彼を守ることができなかった。

彼がいなくなる数日前の水曜日のことである。15号館4階の演習室の机の一部がすり切れていた。フリードマンらが心臓内科の診察椅子の端っこがすり切れたところから，タイプAという心臓疾患にかかりやすい性格傾向が発見されたという話を彼とした。彼は笑っていたが，彼も頑張りすぎのところが確かにあったのではないかと思う。人のため，学生のために一生懸命の人だった。私は，5月16日木曜日のカンファレンスのあと，15号館から一緒に研究室に戻った。その途上，彼に学生さんにいろんな臨床アプローチがあることを伝えたいねと話した。予想に反して，彼は「それは難しいですね」と答えた。その返答にびっくりしたし，元気がないなと思ったが，廊下にて笑顔で別れた。これ

から学会発表の抄録を仕上げるということであった。これが彼との最後の会話となった。翌日金曜日の夜に関谷さんとの共著論文について，最終チェックのメールをもらった。これが最後の通信となった。

髙橋先生が授業に出てこられなかったのは，5月20日の月曜日であるが，彼は18日土曜日の午前10時にも学生さんとアポイントを取っていた。髙橋さんはその学生と会うことができなかった。ぎりぎりまで学生のために，学問のために努力する人だった。私は，亡くなる直前まで農民の肥料の相談に乗っていた宮澤賢治が彼と重なるのである。賢治は，科学と芸術とを結びつけようとした人だ（免田，2012）。そして，賢治の代表作，『銀河鉄道の夜』のカンパネルラと彼が重なるのだ。「僕たちずっと一緒に行こうね」と語りかけるジョバンニの目の前からカンパネルラは突然居なくなってしまった。カンパネルラが髙橋君に思えてならない。自分ができることは，彼の遺志をついで臨床と基礎の橋渡しをすることである。それはあらためて自分の使命だと思うし，彼はそれに取り組む自分を守り続けてくれると今でも思っている。

関谷 実加・髙橋 伸彰・免田 賢（2018）．思春期の発達障害児の親を対象とした親訓練プログラムの開発　佛教大学臨床心理学研究紀要，24，pp.21-33.
免田 賢（2012）宮沢賢治の世界の心理学的考察　教育学部論集，23，pp.147-163.

髙橋伸彰先生へ

私が初めて髙橋先生とお会いしたのは，三回生の心理学中級実験の授業で，真面目で固そうな方，という第一印象でした。
ある日の授業のグループワーク中，実験参加者の統制要因を検討する際に，私が突拍子もない実験参加者の例を挙げると「流石にそれはやばいですね，でも発想は面白いです。」とお声かけ頂いたのが，初めての先生との会話でした。自分の挙げた例は忘れてしまいましたが，何気ない発想も一緒に考えてくださる，真摯な先生にお会いできたな，と感じました。

四回生のゼミを選ぶ際に，「臨床につながる研究をしたい」「卒業研究を楽しみましょう」と，楽しそうにお話される髙橋先生とゼミの雰囲気に魅力を感じ，髙橋ゼミに入りました。
ゼミに入ってからは，自身の研究したいことを実際に研究としてつなげる難しさに悩み，先生にもたくさんご迷惑をおかけしました。
でも，その経験があったからこそ，大学院での研究したいことを顧みることができました。
髙橋先生の目指されている「臨床につながる研究」を私もしたいと思っています。
研究室で一年間ご指導頂きまして，ありがとうございました。

大学院に進学して，院ゼミで，私が修士でやりたい研究の方向性をお伝えしたときに「いいですね，面白そうですね」と仰って頂いた研究を，形にできるよう，自己研鑽に努めます。先生が出してくださった宿題に向き合って，いい研究に出来るようにします。
ゼミ飲み会で先生は本学に対する熱い想いを語られていましたね。その話をもっとお聞きしたかったし，研究のことも沢山お話ししたかったです。
まだまだお伝えしたいことがありますが，私の中ではうまく言葉になっていません。

髙橋先生が今おられるところは，研究されたいようなネタは，ありますか。研究をされていますか。我慢しておられたお酒やおたばこは，あるのでしょうか。
お忙しく過ごされていた分，好きなことをして過ごされれば，と思っています。

髙橋ゼミ二期生，一期生のこと，そして，本学の臨床心理学科のことを，どうか，見守っていてください。
髙橋先生の研究室で研究ができて，本当に良かったです。
ありがとうございました。
ゆっくりと，おやすみください。

佛教大学大学院教育学研究科臨床心理学専攻修士一年生
髙橋ゼミ　古　市　真　菜

髙橋伸彰先生のご業績

【論文】

- **髙橋 伸彰**（2019）．いじめ研究の計量書誌学的検討　佛教大学教育学部学会紀要，No.18，pp.17-29.
- **髙橋 伸彰**（2019）．望ましい行動を増やすには　佛教大学幼稚園カウンセリング，No.4，pp.66-71.
- 木戸 盛年・**髙橋 伸彰**・野田 龍也・嶋崎 恒雄（2019）．修正日本語版 South Oaks Gambling Screen（SOGS-J）のカットオフ点の検討および短縮版 SOGS-J の作成　心理科学研究（関西学院大学），*45*，pp.73-81.
- 関谷 実加・**髙橋 伸彰**・免田 賢（2019）．思春期の発達障害児の親を対象とした親訓練プログラムの開発　佛教大学臨床心理学研究紀要，No.24，pp.21-33.
- **髙橋 伸彰**（2018）．子どもの困った行動が増えるしくみ　佛教大学幼稚園カウンセリング，No.3，pp.64-69.
- **髙橋 伸彰**・木戸 盛年・野田 龍也（2017）．インターネットアディクション尺度の統合――Consolidated Internet-Addiction Scale（CIS）の提案――　日本アルコール・薬物医学会雑誌，*52*（6），pp.287-296.
- **髙橋 伸彰**・箕浦 有希久・成田 健一（2017）．Web調査における Satisficing 回答者の基本属性――調査年・調査会社の比較から――　心理科学研究（関西学院大学），*43*，pp.19-24.
- Nagamine, M., Noguchi, H., **Takahashi, N.**, Kim Y., & Matsuoka, Y. (2017), Effect of cortisol diurnal rhythm on emotional memory in healthy young adults. *Scientific Reports*, *7*, 10158.
- Takano, Y., Ukezono, M., Nakashima, S., **Takahashi, N.**, & Hironaka, N. (2017). Learning of efficient behaviour in spatial exploration through observation of behaviour of conspecific in laboratory rats. *Royal Society Open Science*, *4*, 170121.
- **髙橋 伸彰**（2016）．「ネット依存者」における志向性と脆弱性――各種サービスごとの嗜癖的経験と心理的背景との対応分析を中心に――　人文論究（関西学院大学），*65*，pp.131-149.
- **髙橋 伸彰**・廣中 直行・嶋崎 恒雄・成田 健一（2012）．依存・嗜癖・乱用は同義か?――タイトル・キーワードの計量書誌学的分析――　行動科学，*51*，pp.25-35.
- **髙橋 伸彰**・成田　健一（2012）．Internet Addiction に関する研究の展開――計量書誌学的手法を用いて――　人文論究（関西学院大学），*62*，pp.151-170.
- 廣中 直行・高野 裕治・**髙橋 伸彰**・田中 智子・板坂 典郎・小泉 美和子（2011）．報酬探索の神経機構と快情　認知神経科学，*13*，pp.96-102.
- **Takahashi, N.**, Kashino, M., & Hironaka, N. (2010). Structure of rat ultrasonic vocalizations and its relevance to behavior. *PLoS ONE*, *5*, e14115.
- 高野 裕治・**髙橋 伸彰**・廣中 直行（2010）．意志決定とアイオワ・ギャンブル課題――依存研究との関連――　日本アルコール・薬物医学会雑誌，*45*，pp.420-429.

・ Takano, Y., **Takahashi, N.**, Tanaka, D., & Hironaka, N. (2010). Big losses lead to irrational decision-making in gambling situations: Relationship between deliberation and impulsivity. *PLoS ONE*, *5*, e9368.
・ **高橋 伸彰**（2007）．我が国における依存者による自助活動――ダルクを中心に――　行動科学，*46*，pp.41-47.
・ 和田 清・近藤 あゆみ・**高橋 伸彰**・尾崎 米厚・勝野 眞吾（2006）．青少年の薬物使用問題――全国中学生意識・実態調査（2004年）から――　「思春期学」別冊，*24*，pp.70-73.
・ 和田 清・**高橋 伸彰**（2005）．中学生の飲酒と家族・仲間　日本アルコール関連問題学会雑誌，*7*，pp.63-66.
・ Takazawa, S., **Takahashi, N.**, Nakagome, K., Kanno, O., Hagiwara, H., Nakajima, H., Itoh, K., & Koshida, I. (2002). Early components of event-related potentials related to semantic and syntactic processes in the Japanese language. *Brain Topography*, *14*, pp.169-177.

【受賞歴】
・ 日本心理学会　学術大会優秀発表賞（2014年）
中嶋 智史・間山 広江・請園 正敏・**高橋 伸彰**・高野 裕治（2013）．ラットの社会的再認における前頭前野損傷の影響――実験室ラットにおける社会神経科学の試み（2）――　日本心理学会第77回大会

【競争的資金】
・ 赤ちゃんのスマホ・タブレット利用に関する研究　同志社大学赤ちゃん学研究センター「計画共同研究」　※代表者（研究期間2017年3月―2018年3月）
・ 適正飲酒に関する心理尺度の開発　科学研究費助成事業（研究活動スタート支援）　※代表者（研究期間2015年4月―2017年3月）

【講演・口頭発表等】
・ 12本の国際学会・会議でのご発表
・ 51本の国内学会・会議でのご発表

【その他】
・「論文」以外に4本の著作物